



Title	<翻訳>グラシリ亞ノ・ハーモス著『サンベルナルド』(翻訳:第13章~第21章)
Author(s)	ハーモス, グラシリ亞ノ; 岐部, 雅之; モッタ, フェリッペ
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 49-79
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103345">https://hdl.handle.net/11094/103345</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 【翻訳】

グラシリ亞ノ・ハーモス著『サンベルナルド』

(翻訳：第 13 章～第 21 章)

岐部雅之／フェリッペ・モッタ共訳

### 解題

本翻訳は、グラシリ亞ノ・ハーモス (Graciliano Ramos, 1892 年-1953 年) による長篇小説『サンベルナルド (São Bernardo)』(1934 年) の日本語訳 (第 13 章～第 21 章) であり、以前に公刊した第 1 章から第 4 章 (モッタ、岐部共訳『*Ignis*』第 4 号、2024 年) および第 5 章から第 12 章 (同誌第 5 号に掲載予定) に続くものである。今回、第 13 章から第 21 章を抜粋する意義を説明すべきであるが、そのためにはまず作者の概要、そして本作品の今までの粗筋を振り返る必要があろう。

グラシリ亞ノ・ハーモスは、20 世紀ブラジル文学を代表する作家であり、その作品群は主に社会的リアリズムを基調とし、厳しい社会批判と人間観察が特色である。ハーモスの文学は、ブラジル北東部 (ノルデスチ) 社会に根ざしたテーマを多く扱っており、極貧の中で生きる人々の姿を描いている。『サンベルナルド』では、貧困層から成り上がった地主パウロ・オノーリオの半生が一人称形式で書かれている。主人公が、自らの過去を反芻しつつ物語を綴る形で進行するが、その独白には支配者としての孤独や悔恨が色濃く滲む。

第 1 章から第 4 章では、パウロ・オノーリオの冷徹さや合理性が際立つており、交渉や取引において一切の感情を排除し、目的達成のために手段を選ばない姿勢が窺える。最終的に、サンベルナルド農園を巧みに奪うことで地方社会の権力者としての地位を盤石とする。第 5 章から第 12 章では、主人公が農園をさらに拡大し、経済的安定を図る一方で、政治的影響

力をも強化していく。農業経営の合理化やインフラ整備を進めつつ、地元選挙にも積極的に関与し、典型的な地方有力者（コロネル）になる。また、ここで初めて主人公の妻となるマダレーナが登場する。マダレーナの出現は、物語における家庭内の葛藤と新たな社会的ダイナミクスの萌芽を示している。

第22章以降の話を先取りすることになるが、パウロ・オノーリオとマダレーナの結婚は後者の自殺をもって破綻に終わり、その出来事は主人公が手記を執筆する動機に直結している。結婚生活が悲劇に終わったことへの後悔や罪悪感が、物語全体を貫くテーマである。

物語の終盤にかけては、パウロ・オノーリオの嫉妬心が主たる原動力になるものの、その兆しは既に現れている（「どうしてそんなにマルシアーノの肩を持つんだ？」第21章）。次第に増大するパウロ・オノーリオの不信感は支配欲と束縛に発展し、マダレーナを自殺に追い込む結果になってしまう。その前舞台として今回の範囲がある。

なお、主人公の社会的上昇（第1章～第4章）と社会的環境の描写（第5章～12章）と異なり、第13章～21章は女性の登場人物の多さが特徴的と言えよう。その最大の理由は、主人公の結婚によりその家庭生活が可視化されるからである。

第13章の冒頭に主人公が再会する「金髪の女」はマダレーナを指しているが、マダレーナへの初めての言及は第9章で、下記のようである。

翌日、畑から戻って来ると、軒先にジョアン・ノゲイラ、パジーリヤ、アゼヴェード・ゴンジンがいて女の脚やら胸やらを称賛していた。私が来ると、話の内容が幾分ましになった。

「教養のある、知的な女だ」ジョアン・ノゲイラが言った。

「それに真面目」アゼヴェード・ゴンジンが付け加えた。

パジーリヤは胸や足に比べれば、長所というほどでもないと思った。

「そうだな」マッチ棒で爪をほじくりながら呟いた。（第9章）

マダレーナとの出会いは主人公が結婚を決意した時期と重なる。しかし、パウロ・オノーリオが結婚を思い立ったのは、恋に落ちたからではなく、結婚という考えが浮かんだ背景に、むしろ商業的かつ合理的な意味合いが反映されている。農園の跡継ぎが必要であるという現実的な問題が、結婚

を計画するきっかけとなった。

ある日、結婚することを考えながら夜を明かした。それは特定の女といった何の刺激もなくふと思いついたことだった。恋や愛に疎いことはお気づきだろうし、女というものが奇妙な生き物で、持て余す存在だといつも思っていた。(第11章)

既にマダレーナの噂を聞いていた主人公は社交場で彼女を見かけた際、彼女を結婚相手として考慮し始めるが、本人と直接話す前に、まず男性の仲間たちに意見を求め、彼女について語り合う。周囲の評価や合理性が決断に大きく影響している証左である。マダレーナには教養があり、教師として働いているものの、貧困線をわずかに上回る程度の生活水準しかない。加えて、かつて食うものにも困るような極度の貧困を経験していたことが暗示されており、経済的安定という観点から結婚という選択肢は彼女にとって魅力的であったかもしれない。そのために結婚生活における立場の不均衡がマダレーナの内面的葛藤を引き起こす。

「あなたのお声がけは有益なものですよ、パウロ・オノーリオさん」マダレーナは呟いた。「とてもありがたいわ。でも、よく考えなくては。いずれにしても、あなたには感謝の気持ちでいっぱいなの。本当に。ご存じのとおり、わたくしはヨブのようにとても貧しいですから」(第15章)

マダレーナの躊躇をパウロ・オノーリオは次のようにいなし、やがて二人は結ばれることになる。

「そんな風に言わないでください。それに、あなたの教養や人柄に価値がないわけではありません。いいですか。私たちが同じ考えなら、得をするのはこちらです」(同上)

マダレーナは裕福な生活を手に入れ、服装や立ち振る舞いも徐々に「地主の妻」としての役割を求められるようになる。しかし、そのような外見的な変化にもかかわらず、貧しい人々への共感や支援の思いは途絶えるこ

となく、むしろ農園内での貧困に対する惻隱の情が一層強まっていく。

このような認識の差異は、パウロ・オノーリオにとって理解しがたいものであり、マダレーナの不適応を感じさせる要因ともなっている。貧しい人々と交流するマダレーナの姿を目にしたパウロ・オノーリオは、ますます苛立ちを募らせることになり、やがてそれは嫉妬へと変わるが、その結末は前述のとおり悲劇的である。

なお、マダレーナがパウロ・オノーリオと結婚する際、マダレーナの伯母であるグローリアも農園に住むことになる。グローリアがかつて結婚していたかどうかについて、小説の中で明確な言及はなく、夫や子に関する記述も一切見当たらない。姪と共に生きていることしかわからない。

福祉制度がほとんど整っていない旧共和政ブラジル（1889年-1930年）では、身寄りがない人物にとって老後は不安定そのものである。ましてや財産や頼れる家族がいない高齢女性は、経済的にも社会的にも弱い立場に置かれることは言うまでもない。

グローリアはマダレーナの給料を当てにしながら生活せざるを得ない状況にあり、姪の結婚を機に、パウロ・オノーリオの意向に従う生活を送る。興味深いのは、ヒベイロに対するグローリアの親近感である。ヒベイロは第7章に初めて登場する農園に住み込みの年老いた帳簿係である。かつて地元において権威を持つ存在だったようだが、時代の進歩に置いて行かれ、老後は薄給をもらってサンベルナルド農園に身を寄せている。男性と女性というジェンダーの差異があるが、ヒベイロとグローリアは家父長制社会における「権威のなさ」という共通項によって結ばれている。

旧共和政時代のブラジル社会、とりわけ農園という閉ざされた家庭内空間では、男性の優位性が圧倒的であり、女性の立場は危うい。家父長制に基づく支配構造が当然視され、男性の権威を脅かすような言動は容易には許されない。そのため、マダレーナのように女性としてその体制に抗おうとする試みは、多くの場合、困難や挫折を伴う。彼女の抵抗と結婚生活の軋轢、そしてパウロ・オノーリオの葛藤という二重の構図が、小説の中盤以降において展開されることになる。（解題おわり）

## 第十三章

金髪の女にまた会った。州都からの帰り道のことで、そこへ出向いたのは恥知らずのブリットのせいだった。

ことのしだいは次のとおりである。電報を送ったあと（覚えておいでだろうか、あの泥棒野郎への二百ミルヘイスを拒否した電報を）、『ガゼッタ紙』は私を中傷し始めた。初めは皮肉たっぷりの遠回しだったが、間もなく当て擦りが露骨になると、二つの記事が出た。その中で、ブリットから人殺し呼ばわりされたのが一番穏やかな言い方だった。その不名誉な言葉を読むと、鞭を手にして町へと向かった。

「やるべきなのは、あいつを訴えることですって」ジョアン・ノゲイラが助言した。「牢屋にぶち込むのは容易いでしょう」

「それにご自身を守りたいなら、わが方には『クルゼイロ紙』があります」アゼヴェード・ゴンジンが言った。「書けますよ。それとも自分か、ノゲイラが書きましょう。ただ残念なことに『クルゼイロ紙』は発行部数が限られていますから。手元にあるのはこれだけです。何なりと申しつけください」

「ありがとう、ゴンジン。ありがとう、ノゲイラ博士。あとで決めよう。こんな馬鹿げたことに頭をひねる価値もない」

こうして夜の十一時までホテルに留まって、トスタン硬貨を巡ってドミノで遊んだ。

翌日、電車に乗ってぐっすり眠ると、十時に中央駅で目を覚ました。すぐさま鞭を脇に抱えると、顔という顔をじっくりと見始めた。

コメルシオ通りを進み、リヴラメント通りとアレグリア通りを曲がって、『ガゼッタ紙』の社屋前で立ち止まった。柵越しの汚れた小さな箱を一瞥すると、中に入って、植字室と印刷室を通り抜け、奥の編集室に行き当たった。そこには、顔色の悪い青年が一人だけおり、前日のレシフェ各紙に関する電報を準備していた。例の編集長はパジュサーラに向いていた。

「ありがとう」

同じ道を通って戻り、役所の時計塔で一時間ばかりポンタ・ダ・テーハの市電の乗客を眺めた。とうとうネズミ面のブリットが現れた。

「やあ」

彼は後退って踏み台にまた足をかけようとしたが、市電はもう離れつつあった。品格ある眉を寄せた。鞭を目にすると青ざめて、口ごもりながら言った。

「おお、こんなところでお会いできるとは。ちょうど良かった。そうそう、いろいろご相談があつて」

私は奴の腕を掴んで時計塔のそばへ引っ張り寄せ、通行人を驚かせないように声をひそめて言った。

「なあ、このろくでなし野郎。あの記事は……」

「あれはお金もらって書かされた記事で」ブリットが答えた。「一般投稿欄ですよ？ さあ編集室へ。分かり合えますって」

そのお返しに、私は首筋を引っ搔き、鞭で打ってやつた。大勢の人たちが集まって来て、警官が警笛を鳴らした。抗議や叫び声が上がると、ついにコスター・ブリットはその場を抜け出し、マルチリオス方面に向かってコメルシオ通りへと遁走した。

私はホテルへ戻ろうとしたものの、警察から呼び出しを受けて昼食を取る時間がなかった。繰り返し尋問を受けて身動きもままならず、三時の電車も乗り過ごした。気難しく愚かな奴であることを警察署長本人に分からせることができなかつた。不愉快な気分で苛々しながら、弁護士を頼つて（車代や心づけなど細かな経費を除いて三百ミルヘイス）、二十四時間後に電車に乗つた。その前には内務長官の説教を聞かされた。報道の自由や何やら馬鹿馬鹿しいことを垂れていた。

客車で日刊各紙を買った。騒動を報じているところはなかつた。頼もしい奴らだ。私は養蜂に関する興味深い部分を読み始めた。警察署長の愚行や内務長官の言う自由主義は少しずつ忘れていた。ブリットを許すことにした。あいつは心の優しい奴だし、同じ過ちは繰り返さないだろ。新聞を読むことに集中した。蜂たちは間違ひなく、私たちの富の源泉になり得る。

そのとき、黒服の女性が隣に座つて來た。太陽の光が煩わしかつたようだ、私はカーテンを下ろした。

「どうもご親切に」

よく見ると、ひと月前にマガリヤンイス博士の家でマルセラさんの小説の話に耳を傾けていた人だと気づいた。

「いえいえ、グローリアさん」

骨ばつた膝の上に破れかけの箱を抱えていたので、私は声をかけて自分の荷物のそばに置いた。内気な婦人だつた。薄っすら笑みを浮かべ、

振舞いはみすぼらしい。電車が動き出した。会話を交わし始めると、言葉が弾んで打ち解けた。

「このグレート・ウェスタンは何とも言えません。まったくの出来損ないで。電車だなんて。豚小屋ですよ」

電車での旅では、いつもこんな感じで始める。グローリアさんは動揺して、誰かに聞かれるのではないかと落ち着かなかった。客車は確かに居心地良いものではないと、彼女は小声で打ち明けた。

「まったく酷いものですね、グローリアさん」

彼女は恭しくこちらをじっと見た。

「以前お会いしたことがあるような。覚えていません。わたしの記憶力がお粗末なものですから」

「先月、裁判官のお宅で。あなたと金髪の娘さんがいました」

目を見開いた。

「ああ、そうでしたわ」

そこで会話は途切れた。また取り戻そうとして私は新聞を広げ、指をさした。

「ここに養蜂に関する素晴らしい記事がありまして。これを書いた記者はなかなかの腕を持っていますよ」

彼女は理解できなかったようだが、突然声を上げた。

「やつと思い出したわ。ノゲイラ博士と政治の話をしていましたわね」

「おっしゃるとおりで」

ここで会話が止まった。

「州都にお住まいなのかしら」

「いいえ、内陸部に住んでいます」

「ヴィソーザに？」

「ええ」

「わたくしも少し前に。でも小さな町で……荒れたところじゃありません？」

「町は小さかろうが、大きかろうが気にしません。何もかも荒れています。私は田舎を好んでいますね。田舎を」

グローリアさんはむすっと表情が曇った。

「田舎に？ なんとまあ。田舎は動物にしか合いませんよ。それなのに、あなたは田舎にお住まいなの？」

「サンベルナルドに」

グローリアさんはサンベルナルドのことを知らなかった。それには不快にさせられた。私にとってサンベルナルドは世界で一番重要な場所だったからだ。

「素晴らしい農園です。この辺りの腐った飲み水なんて向こうにはありません。泥ですよ、ええ。快適で、衛生的です、グローリアさん」

グローリアさんは背筋を伸ばし、声を張った。控えめな態度はもうなかった。

「わたくしにはちょっと。町で生まれて、町で育ちましたから。そこから出たら、水から飛び出した魚のようになってしまふわ。だから、州都の学校へ移れないかと頑張ったのだけど。何かとコネが必要で。期待だけ持たされて……」

「すると、教師をなさっておいでで？」

「いいえ。教師は姪です」

「マガリヤンイス博士の家であなたと一緒にいたあの若い女性でしょうか？」

「ええ」

「グローリアさん、姪御さんのお名前は？」

「マダレーナよ。それにね、あの子は成績も優秀なの」

「ああ、そう言えば、ノゲイラとゴンジンが彼女のことを話していました。才色兼備な人だと。間違ひありませんね。ゴンジンがずっと言っていました。『クルゼイロ紙』の、だんご鼻のゴンジンです」

「分かります」姪への称賛を聞いて微笑んだ。「それにしても、あんな子が辺鄙なところに行ってしまうなんて。あの……」

「パウロ・オノーリオと言います、グローリアさん。もったいない。初歩を教えるなどつまらないですよ。失礼を承知でお伺いしますが、姪御さんは学校でどれくらい稼いでいるのでしょうか？」

グローリアさん声を落として、初等教育の女性教師はわずか百八十ミルヘイスだと答えた。

「いくらですと？」

「百八十ミルヘイスです」

「百八十ミルヘイス？ 呆れましたな！ 不幸なことですよ、奥様。月に百八十ミルヘイスでどうやって生きていけるでしょうか。言いたいこ

とが分かりますか？ ある程度の地位のある人がこんな不幸に甘んじてしまうとは、怒りさえ湧いてきます。学校で勉強しなかった使用人が私のところに何人もいますけど、もっと稼いでいますよ。グローリアさんは、どうして姪御さんにその仕事を辞めるよう勧めないのですか？」

グローリアさんは仕事探しが難しいことや、年金について語った。

「年金なんて、何の価値もありません。それで仕事の方は……姪御さんとあなたが大いに稼げる方法を教えてあげましょう。それは雌鶏の飼育です」

グローリアさんは居心地が悪くなつた。私が興奮して大声で話していくので、隣の乗客が笑い出したのである。短い口髭を生やした若者で、ルビーの指輪を嵌めていた。私は髭の生えた顔と毛深い手を近づけた。

「何のことだか知らずに笑っているのか。卒業証書を持っているようだな。稼ぎはどれほどなんだ？ 金持ちの父親がいなければ、検察官といったところか。雌鶏を育てる方が良い商売になるぞ」

若者は気まずくなつた。

「立派な仕事ですよ、グローリアさん。まともな仕事です。養鶏に力を入れるなら、オーピントン種がお勧めです。学校なんて、くだらない。農園にひとつ作つて、パジーリヤに任せています。誰だか分かりますか？ 馬鹿な奴です。それでも、聞くところによると進展しているようで。それで私も信じています。少なくとも、ゴンジンとシルヴェストレ神父が出向いて生徒たちを見たところ、すべて順調だったということです」

グローリアさんは顔のしわを寄せたり、伸ばしたりした。

「人にはそれぞれ生き方がありますでしょう」

「いやはや！ サンベルナルドに足を延ばしてくだされば、農業がいかほどのものかお見せしますよ」

この会話は当然のことながら、紙に書かれたように初めから終わりまでを切り取つたものではない。途切れたり、繰り返したり、誤解があつたり、矛盾があつたりするなど、あとでどう読まれるかを考えずに話せばそれも自然なことである。私が興味深いと判断するものを再現する。いろいろな部分を削除し、修正も施した。たとえば、ルビーの指輪の若者に放つた説教は、いま書いている味気ない文章よりも毅然として、長時間に及んだ。グローリアさんの片頭痛の部分（確かに、片頭痛は大袈

裟ではなく移動中の半分を占めた）は削除となった。同じく、私やグローリアさんのくだらない言葉の数々もここでは落とした。私の目が届かなかつたものや役立ちそうだと思ったものは相当残つた。これは私なりのやり方である。出来事から一部を抜き出すと、残りは擦りかすだ。次の例を見てほしい。コスタ・ブリットを役所の時計塔に引きずつたとき、四つか五つの下品な言葉を浴びせた。そんな言葉がいらなかつたのは、鞭打ちの効果を高めるわけでも、低めるわけでもない。鞭打ちの場面をもう一度読んでもらえれば気づくと思うが、品のない場面は消えて浄化され、かなり控えめに描写されている。

ひとつ省きはしたものの、いい効果をもたらしそうなのは風景だつた。ただ上手く行かなかつた。実際、私の語り方では、この地から離れた場所で行われた講演のような印象を与えててしまつてはいる。要するに、カーテンを閉めていることもあるって、ほかの窓からちらつと見えるのは、駅の一部や茂みの端の部分、それに製糖工場やサトウキビ畑だけだつた。サトウキビ畑が広がつていたが、この種の農業には惹かれない。ゼブの若牛も見たが、私が思うに、あれは家畜を台無しにする。

今では全くもつて曖昧である。もし描写しようとすれば、三時十五分に現れた湖のヤシと、そのあとに出てきたマンゴーやカシューを混同してしまうかもしれない。それに、私は規則に沿つて書くつもりはない。それ故に過ちを犯す。過ちになるだらう。そこで、ひとつの章を二つに分ける。確かにこの先の話は、こんな寄り道をする前に言えたはずだ。でも、迷いはない。マダレーナのために特別な一章を設けようではないか。

## 第十四章

グローリアさんが駅で紹介してくれたのは、迎えに来ていた姪だつた。私は手を空けようとしたとき、まごついて荷物運びに渡そうとしていた小包をひとつ落としてしまつた。

「どうも初めまして。名前は伺つていました。お見かけしたこともあります。でも、顔と名前が一致していなくて。数日前にお会いしたのに」「ひと月前ですね」

「そうです、そうです。あなたの伯母さんとその件で話していたところで。旅の最高のお供でした。改めまして、よろしくお願ひします」

私はホテルへと向かった。そして彼女たちの家も同じ方向だったので、一緒に行くことになった。

「あなたは美しい農園をお持ちだと、マルセラさんから聞いています」マダレーナが話しだした。

「美しいですか？ さあ、どうでしょうか。まあ美しいかも知れません。私が知っているのは申し分なく機能する農園だということです」

言葉に詰まって慌ててしまった。それまで自分の感情というのは単純かつ未熟なもので、ジェルマーナやホーザといった相手に隠す理由もなかった。遠慮なく口説いても彼女たちに驚かれることはなかったが、師範学校出身の女性ともなれば話は異なる。私はしかめ面をして、荷物運びが頭に載せていた小包を数えた。グローリアさんに愛想よくしようと努めた。

「グローリアさん、ご招待はいつでもできます。農園へ来て数日過ごしてくれますよね。そちらの先生をぜひお連れください。車を寄こすので十分で着きます」

グローリアさんは何も約束していなかった。マダレーナは驚いた。

「まあ、そんなこと」

「どうして？ 今は休暇中でしょに……」

「小旅行なんて……裕福な方のすることだわ」それから微笑んだ。「見ず知らずの二人を家に連れて行ったら、ご家族が何とおっしゃられるか」

今度は私が驚く番だった。

「いや、家族はいません、マダレーナさん。過去に一度も。一人暮らしですよ」

「それだとなおのこと良くありませんわ」マダレーナが答えた。

「差支えます」グローリアさんが言った。

私はあご鬚を搔いた。

「それは残念です。体を休めるのに絶好の場所なのに。なるほど。差支えがあるのであれば、今の話はなかったことにしましょう」それから付け足した。「それにしても、差支えとは？ グローリアさんに北京のアヒルをお見せしたかったのに。本当に見事なものですから。マダレーナさんは北京のアヒルをご覧になったことはありますか？」

「いいえ、まだ」

「そうでしょう」ボソッと言った。「一生かけて勉強するなど、私には分かりません」

「少し休んで行かれますか」グローリアさんが言った。

二人の家であるカナフィストゥラの玄関前だった。

「ありがとうございます。私はホテルに向かいます」少し間を置いた。「お二人はこんな粗末なところにお住まいなのですか。では、私はここで。サンベルナルドへいらっしゃるようにしたら、お知らせください。車を手配しますので」

「ええ」グローリアさんが言った。「それに、ここまでご一緒くださりありがとうございました」

「お役に立てて何よりです」

ホテルに着くと、浴室へ向かって煤と汗を落とした。そしてテーブルにつこうとしたとき、ジョアン・ノゲイラ、アゼヴェード・ゴンジン、シルヴェストレ神父がやって来た。

「で、いったい何の騒ぎだったんですか」アゼヴェード・ゴンジンが訊いた。「昨日の夜、小耳に挟みましたよ」

「驚きました」神父が割って入って来た。「酷い騒動です。確かにブリットが悪い」

「そう。仕方なしに。悪い奴ではないのだが。二百ミルヘイスを欲しがるもんだから、可哀想に。はねつけてやったよ。馬鹿だな。二日間悩まされたことを横においても、六百ミルヘイスは十分にかかった。それに、あいつが二百受け取ったら、もう二百と頼んで来るだろうし、きりがない」

「昨日の情報では、刺されたブリットが病院にいて」シルヴェストレ神父が言った。「死んでいた、とも。幸いもう安心しましたが。軽い怪我だったとか」

「怪我も何も、あったのは口論だ。ブリットが暴言を吐くので言い返してやると、人が集まって、関係のない警察まで割り込んで来て。何もない」

「そう思っていました」シルヴェストレ神父が声を上げた。「あなたのように慎重な人が騒ぎを起こすなんてないでしょう」

「もちろん」アゼヴェード・ゴンジンが叫んだ。「日曜版にあの件で記事を二つ書きました」

ジョアン・ノゲイラが寄ってきて耳元で訊いてきた。

「本当に、何があったんですか」

「つまらない口論だ」その流れでこう言った。「ところで、ノゲイラ博士。あのグローリアさんというのは誰なんだ？」

「教師の伯母さんのことですか？」

「そう。どういった感じの家族なんだろう？」

「どんな意味で？」

「あらゆる意味だ」私は曖昧に返事をした。「グローリアさんと電車で一緒になって。良い感じの人だな」

「でも、何の興味がおありですか？」

「というのも、グローリアさんが匂わせてきて。姪の転任のことで。校長に会ったことはないが、シルヴェイラとは顔なじみで、施策課の。転任だってできなくはないかも知れない。評判が良ければ問題ない」

「彼女は素晴らしい教師ですよ、パウロさん。真っ直ぐな性格をしていて。そんな人を動かそうとは、どんな意図があるんですか。彼女がいなくなったら、どうなりますか。字の読み書きもできない年寄りが送られてきますよ」

「確かに」それから大きな声で言った。「夕食はどうする？」

三人は礼を言ってから暇を告げた。シルヴェストレ神父が抱きしめてきた。

「友人がこんな面倒なことに巻き込まれるとは。悪いのはブリットですよ。苛々しがちな奴ですが、近ごろ『ガゼッタ紙』ではうまくやっているようです」

私はついて行った。

「なあ、ゴンジン。お前さんに話があるんだが」

彼が立ち止まった。

「腹が減って仕方がないんだ、ゴンジン。二日間ほとんど何も食べていない。どうだ。食べて行かないか？」

夕食は断ったものの、ビールならとゴンジンは受け入れた。私がデザートを食べるころには、三本目を飲むところだった。

「ゴンジン、少し前に教師のことを話してくれたじゃないか」

「マダレーナのことでしょうか？」

「そうだ。この間の夜に会ったんだが、好みの顔をしていた。ちゃんとした女だろうか」

アゼヴェード・ゴンジンは四本目のビール瓶を開けると、ひたすら称賛の言葉を並べた。

「素晴らしい女性ですよ。『クルゼイロ紙』に載せる記事だけでも分かります」

私は落胆した。

「まさか、記事を書いているのか」

「ええ、教養豊かで。彼女とどんな関係が？」

「さあ。ある計画があったのに、『クルゼイロ紙』への寄稿で冷めてしまった。良識ある人だと思っていたが」

「なんと」ゴンジンがむつとして言った。「そんなこと思わないでくださいよ」

「分かった。お前さんに隠しごとはない。実を言うと、パジーリヤにはうんざりしているんだ」

「飲んで騒いだ、とか」

「もっと酷い。農園に社会主義を持ち込もうとしている。あいつが馬鹿なことを言っているのを耳にした。あまり気にせずそのままにしておいたのだが、よくよく考えると、ほかの働き口を見つけてやる方が良いかも知れない。どこか遠くの」

「だから、マダレーナを誘うのですね」

「そうだ」しばらく考えた。「でもどうだろうか。彼女がしっかりした女であれば」

「しっかりした？　もちろんですよ。むしろ相手が受け入れないかもってことが問題でしょう。こんな僻地に住むなんて」

「それは年取った間抜けな伯母さんの戯言だ。でも、姪の方が、お前さんの言うように良識しだいで受け入れるだろう」

アゼヴェード・ゴンジンは炒ったピーナッツを咀嚼しながら、ビールを飲んでいた。

「まあ、そうかもしれませんね。彼女にとって得があるのは、間違いなく報酬が上がることですから」

「確かに」

「そうかもしれません。ただ、哀れなパジーリヤのことが気の毒で」

「そんなことはない。どこか働き口を見つけてやる。さっき言わなかつたか。嫌な奴だ、可哀想に。それで、あの女のことだが……」

「話はまとまつたんですか？」

「いいや。まとまついたら、お前さんには相談しない。ゴンジン、ひとつ頼みごとを聞いてくれないか。残つて欲しかつたのはそのためだつたんだ。探つてくれないか？」

アゼヴェード・ゴンジンは渋い顔をして、ことを大袈裟にした。

「でも、彼女とは親しくありませんし。パウロさんから話してくださいよ」

「できない。家を空けて二日になるし。今日サンベルナルドに戻らないといけない。それに、あんな人たちとの接し方がどうも分からん。回りくどくて……。彼女をうまく説得してくれないか、ゴンジン。頼むから」

「分かりましたよ。田舎の風景やら、詩情やら、人間の素朴さを語りましょう。それでも納得しなかつたら、ほんの少しの愛国心を上からまぶしてあげますよ」

## 第十五章

招待してからというもの、二人とずいぶん親しくなつた。マダレーナはすぐには決心しなかつた。そして私はといえば、返事を聞くことを口実に、カナフィストゥラの小さな家へ通い始めた。ある日、グローリアさんにそれとなく訊ねた。

「あなたの姪御さんはどうして夫を探さないのでしょう？」

「姪は自分を売つて歩き回る虫のついた豆ではありませんよ」不愛想に言った。

「そんなことは、グローリアさん。まさか。友人としての助言です。将来を確かなものにするには……」

グローリアさんが背筋を伸ばしたところ、萎んだ胸が平らになつた。その突然の厳かな動きのせいで、すでに着古された黒いワンピースが腹のところでピンと張り、背中の方では弛んだ。元の姿勢に少しづつ戻ると、肩甲骨は擦り切れた布にまた馴染み、囁き声が聞こえやすくなつた。

「ご存知のとおり、女にとって結婚はそのときの状況しだいですから‥‥‥」

「そうかもしれません、グローリアさん。健康にも良いので」

「ただ、大失敗に終わる結婚も多いですから。それに、強制されるものでもありませんわね」

「そう、確かに。申し込むべきものです。何もかもうまく行っていません、グローリアさん。誰と結婚すべきか分かる人はいないでしょう」

「わたくしとしては、両想いということが欠かせないと考えています」

「両想いですか。安っぽいものですね。夫婦関係が順調なら子どもたちは良い子に育ちますし、順調でなければ子どもたちの成長も知れたものです。畜産学の冊子に書いてあります」

こうした言葉を交わしたあと、綿花の収穫のために、私は二週間サンベルナルドに留まらなければならなかった。何度か例の状況のことを考えた。グローリアさんが口を滑らせたかもしれない。何を言ったのだろうか。こちらの提案が良くなかったのではと、不安を抱えながらマダレーナに会った。歓迎された。

「農業はどうかしら」

「ぼちぼちです。ええ、ぼちぼちですよ。収穫がどうなるかまだ見通せないので。それで、学校の方はいかがですか。子どもたちやグローリアさんは、お変わりありませんか。そうだといいのですが。でも恐らく、農業のことは気にかけていらっしゃらないでしょう。それに、私は別件があつて来たんです」

「ゴンジンさんからお聞きした招待のことですか？」

「まあ、そんなところです」私は戸惑った。

「お引き受けできないと返事をしておくべきでした」

「まさか、マダレーナさん。報酬だって上がるのに」

「応じられませんわ。教師生活が六年になるのに、安定を不安定と替えるなんて。この辺りの私立学校なんて、今日開校されたと思ったら、明日には閉校されても‥‥‥」

私は頷いた。

「その慎重なお考えを嬉しく思います。実際、元も子もなくなるかもしれないんですから」

「お分かりでしたら」

「分かっていますよ。なので、別の提案を持って来ました。率直に言いますと、学校云々というのは言い訳でして」

マダレーナは待っていた、眉根を寄せて。

「言い難いことですけど。ご理解いただけないと……。さて、前置きはほどほどにして、腹を割って誠実にお話します」

私は咳をして、まごついた。

「つまりですね、伴侶を選ぶことにしたのです。それで、あなたが私の好みに……ええ、初めてお見かけしたときに惚れたわけでして」

言葉に詰まった。真剣な面持ちで青ざめていたマダレーナは黙ったままでいたが、驚いてはいない様子だった。

「あなたの思い描く理想の男でないことはもうはっきりしています」

マダレーナは細く長い指をした手で言葉を振り払うように言った。

「そんなことありませんわ。お互いのことを知らないではないですか」

「いえいえ。私の日常を話してきませんでしたか？ 言わなかつたことは些末なことです。見聞きしたところでは、あなたには良識があつて、儉約家で、分をわきまえている。良い母親になるでしょう」

マダレーナは窓辺へ行き、しばらく身を乗り出して外を眺めていた。彼女が振り向いたとき、私は部屋の中を歩き回ってパイプに煙草を詰めていた。

「わたくしたちの間には違いがたくさんあるはずよ」

「違いますと？ それがどうかしましたか。違いがなかったら、ただ一人の人間になってしまいます。たくさんあって当然です。ちょっと失礼、パイプ煙草に火をつけます。あなたは学校でいろいろ難しいことを学び、私はそこらで頭をひねりながら別のこと学びました。四十五歳です。あなたは二十歳そこそで」

「いいえ、二十七歳よ」

「二十七？ 二十歳以上だなんて誰も思わないでしょう。これでもう互いの距離も縮まつきました。もう少しその気になれば、一週間後には一緒に教会にいますよ」

「あなたのお声がけは有益なものですよ、パウロ・オノーリオさん」マダレーナは呟いた。「とてもありがたいわ。でも、よく考えなくては。いずれにしても、あなたには感謝の気持ちでいっぱいなの。本当に。ご存じのとおり、わたくしはヨブのようによくても貧しいですから」

「そんな風に言わないでください。それに、あなたの教養や人柄に価値がないわけではありません。いいですか。私たちが同じ考えなら、得をするのはこちらです」

## 第十六章

一週間後の夕方、真昼からそこにいた私はコーヒーを飲みながら、機嫌よく話をしていた。盛り上がっているときに、アゼヴェード・ゴンジンが遠慮なく割り込んできて、形容しがたい無礼な発言をした。

「ああ、ここにいたんですか！ マダレーナさんにお祝いを伝えにきました。お会いできて良かった。おめでとうございます」

「一体何のことだ？」私は驚いて訊いた。

「結婚のことですよ」アゼヴェード・ゴンジンが答えた。「噂が広まつて。あなたが何も言わないものだから……で、いつですか？」

返事はしなかった。マダレーナは刺繡の糸を数えた。グローリアさんはカップを持って立ち止まっていた。ゴンジンの首を折ってやろうかと思ったが、まずいことに気づいた彼は、壁にもたれて頸をさすった。私は立ち上がって窓辺へ寄り、気まずさをごまかそうとした。ゴンジンが寄って来るので、小声で言った。

「酔っているのか？」

「秘密ではないのかと。皆が知っているから」

「馬鹿野郎が」

そして、また腰を下ろした。耳が松明のように赤くなって恥ずかしく、受胎聖母病院と長続きしなかった『文芸娯楽クラブ』に縋りついた。本棚は埃まみれで、役員就任のために年に一度ぱらぱら捲られるものだ。

「それが何の役に立つって言うんだ？」

アゼヴェード・ゴンジンは座って、少しずつ穏やかになって言った。

「良い仕事をするクラブですよ、パウロさん」

「ふざけるな。病院は分かる。でも、こんなところに図書館なんて、何のために？ 毎月ノゲイラが小説を読むためだけじゃないか。文学のくそったれが……」

ひとつの考えに拘るアゼヴェード・ゴンジンは、七面鳥のように周りをうろうろした。

「教養は欠かせません。教養はカギですよ。そう思いませんか、マダレーナさんは？」

「読書に慣れている人なら……」

「慣れては駄目です」私は遮った。「教養と印刷された紙を読むのを取り違えないでください」

「同じでしょう」ゴンジンが言った。

「そんなわけがあるか！」

「では、読書をせずにどうやって教養を身につけるんですか」

「そこら辺を歩き回って見聞きするんだ。ノゲイラはかなり賢くなつて学校を出たが、証人にどう尋問すべきか分かつていなかつた。今ではラテン語を忘れたとはいへ、立派な弁護士だ」

「それなのに、あなたは病院が必要だと思っていますよね。それで、どうして農業関係の論文を捨てないんですか」

「話が違う。いずれにしても、医者たちは本を読むより、実験のときに腹を裂いたり、生体や死体を切ったりして勉強する。私は暇なときに経験者が観察したものを見ただけだ。でも、信じすぎないように、何よりも自分を信頼する。作家たちはサンベルナルドの人や土地をそばに来て見たわけではない」

マダレーナは頷いていた。

「まったく違うよ。わたくしたちはそんな考え方には慣れていませんから。この間、劇場で映画を観たのですけど、本で読むよりもっと学べたと思うわ。それに時間もかからなくて済むし」

「しかも、つまらないことで頭を満たすものじゃない」私は付け加えた。「お前たちは価値のないものを鵜呑みにし過ぎだ、ゴンジン。そこらには四行で収まるような本がある」

グローリアさんは眠りかけていた。アゼヴェード・ゴンジンは驚いて腹を立て、肩を竦めた。

「自分にとって、本は役に立つものですよ。パウロさんが役に立たないと思うのなら、それなりの理由があるのでしようが」

「私が言っているのは『文芸娯楽クラブ』の無駄話のことだが」

「残念ですけど、あなたに不要でも、ほかの人たちには必要かもしれないってことよ」マダレーナが言った。

「そのとおりです、素晴らしい」アゼヴェード・ゴンジンがしたり顔で言った。「それなんですよ。調和に、美しさに」

「つまらんことだ」

グローリアさんは立ち上がって、出て行った。やり取りが尽きかけていたこと也有って、私たちは黙り込んだ。アゼヴェード・ゴンジンが煽ろうとしたものの、無駄だった。

「何でしょう、この埃は。北東風かな」と言って、その場を去った。

私は気を取り直して、マダレーナに近づいた。

「ほら、お分かりでしょう。もうあちこちで噂されています。ゴンジンの言うとおり、その話題で持ち切りです」

返事はなかった。

「ここにはもう足を踏み入れません。まず、あなたを煩わせたくありませんし、次に馬鹿げたことだからです。もちろんもうお考えですよね」

マダレーナは裁縫の手を置いた。

「分かり合えたようだわ。ずっと田舎で暮らしたいと思っていました。早起きして、お庭の手入れをするような。向こうにお庭はありますよね？でも、どうしても少しお待ちにならないの？素直に愛を感じていないから」

「まさか。あなたがそうだと言っても、私は信じません。それに、誰かに想いを寄せて、やみくもに決断する人は好みません。なおさら、こんな決断であれば。日にちを決めましょう」

「急がなくても。一年後とか……いろいろ準備もしないといけませんし」

「一年？一年かかる取り決めなんて意味がありません。何が足りないのですか？白いドレスなら二十四時間あつたらできます」

廊下から足音が聞こえたので、私は声をひそめた。

「伯母さんに伝えませんか？」

マダレーナはさえない表情で微笑んだ。

「分かりましたわ」

「込み入った話はもう終わったの？」グローリアさんが扉から訊いた。

「眠くって仕方がなかったのよ」

「私も。悪いのはゴンジンで。とっぴな考え方ばかりしているもので」

どう願い出ようかと悩んだが動搖してしまい、言うべき言葉が出てこなかつた。

「グローリアさん、私とあなたの姪御さんは一週間以内に一緒になることをお伝えします。もっと正しい言い方をすると、結婚します。もちろん、あなたも一緒にですから。二人で食べても、三人で食べても変わりありません。それに家は広いし、家具も揃っています」

グローリアさんは涙を流した。

## 第十七章

サンベルナルドの礼拝堂にある聖ペドロの祭壇の前で、シルヴェストレ神父が私たちの結婚式を執り行つた。

一月末。咲き誇るイペーの花が森に黄色い点々を散りばめていた。朝、山には霧がかかる。この間の雷雨のあと、小川は轟々と流れる川のようだ。湖に流れ込む前に水が落ちて来る滝は泡で着飾つている。

マリア・ダス・ドレスがいつもぴかぴかに磨いていた照明のコードや電話、家具、金属製の道具を見たとき、グローリアさんはここでの暮らしも悪くないと吐露した。

「そう言ったでしょう」

彼女には家の左側の、書斎の奥にある部屋を当てがつた。その窓からは教会の赤い壁が見えた。今ではその壁も雨水のせいで緑がかっているものの、当時は新しく、生肉のような色味をしていた。私とマダレーナは右側に構えた。ベランダからは綿花畠、牧草地、製材機付きの綿繰り機、それに丘に沿つてぐるりと伸びる街道が遠くに見えた。

「新しい暮らし始まるのね」マダレーナは嬉しそうに言った。

それから、彼女について幾つか気づかされることがあって驚いた。ご存知のとおり、私はその顔とわずかな情報に満足していたから。

彼女の言葉遣いに合わせようと一週間努めてみたが、言い間違いは避けられなかつた。方針転換である。軽率だったのだ。マダレーナにとつてそのようなことはお構いなしだった。小学校の人形だと思っていた。間違いだ。

マダレーナはパジーリヤを『卑しい心の持ち主』だと思って寄せ付けなかつた。（私はパジーリヤの心なんてどうでも良いと言って聞かせた。農園の連中には仕事をさせるだけで、ほかに関係はなかつた） そう、寄

せ付けなかつたのだ。ところが、ヒベイロさんることは気に入った。書斎に入って本のページをめくつたり、書類を調べたり、動かなかつたタイプライターを分解したりした。そして結婚から二日後、破瓜の余韻を漂わせて綿花畠へと駆け出すと、枝で服が破れた。夕食のとき、私は綿繰り機の前で機械技師と話しているマダレーナを見た。

「素晴らしい。これぞ女ですよ」と私は言いながらも、表に出て姿を見せないように忠告した。「あの家僕たちは荒々しい連中です。働きたいというなら、そうですね。マリア・ダス・ドレスと働くのはどうでしょう。農作業の連中は私に任せてほしいから」

「マリア・ダス・ドレスの仕事はいまいちなのよ。それに、ここには寝るために来たわけじゃないの」

「初めは誰でもやる気に満ちています」

「ちなみに」マダレーナは続けた。「カエターノ親方の一家が生活に困っています」

「もうカエターノ親方に会った？」私は動搖した。「生活に困っているつて、いつものことではないですか。それに実際のところ、もう親方は必要ありません。どこか他所で必死になって働く方がいいでしょう」

「病気なんですって」

「蓄えておくべきだったんです。どいつもこいつもそんな風に先のことを考えません。とにかく病気になつたら、報酬の前払いやら、薬やらと。儲けが全部なくなります」

「親方は働き過ぎなのよ。それにもうかなりのお年でしょう」

「確かに力は衰えました。小さな石材でも金梃がいるし、それを移動させるにも石切り職人たちを呼んでいます。報酬六ミルヘイスの価値もありません。でも、もう心配は無用です。必要なものを送つてやれば。キヤッサバの粉を袋半分とフェイジヤン豆を何リットル分か。稼いだ金も水の泡です」

## 第十八章

「奥様は帳簿のつけ方に精通していらっしゃる」ヒベイロさんが言った。

ヒベイロさんは住み込みで働いてくれていたが、私は快く思われていなかつた。誰のことも好きではなかつたようだ。彼の中ではかつての村

のことと頭がいっぱいだった。今や町となったそこには、半世紀前、綿繰り機、ロザリオの祈り、オイルランプ、聖ジョアンの夜の予言があつた。七十歳を過ぎでも、特に小道を好んで歩いていた。ただ電話で話すときは、おずおずとしていた。自分の生きている時代を憎んでいたが、堅苦しい言動や当時もう廃れていた表現を使って息苦しさを凌いでいた。まだ僅かながらに残っていた熱意で、分厚い帳簿の山が温められていたのだ。複雑な記録でも、角や背が革で装丁された帳簿に愛情を込めて記していた。ひとつの項目を書くのに十五分かかった。文字は大きくて丸みを帯び、震え気味で、冒頭の文字は大きく飾られていた。

「実によく精通していらっしゃる」ヒベイロさんは続けた。「あなたが絶賛するやり方にまるまる同意するわけではありませんが、その気になるなら帳簿係をお任せしても大丈夫でしょう」

「ありがとうございます」

「いえいえ。奥様はこの分野をご存知で、字の心得もお持ちだ。こちらはもう老いぼれで。もうすぐ……」言葉を探す。「もうすぐ神のそばにいますよ」

「いつもの台詞ですね」パジーリヤがぶつぶつ言った。「あなたはまだ元気なのに」教師と帳簿係の仕事を兼ねようと気を揉んでいたのだ。

「気力も体力もない」ヒベイロさんは答えた。「それで、帳簿を台無しにしない人に預ければ、安心して死ねる」

「それはお安い御用で」パジーリヤが小声で言った。

「そうかもしれないが、知つておくのは良いことだ。奥様は……」

「面白いものがあります」パジーリヤが言った。「マダレーナさんはいろいろ書いていましたよ」

「何か問題でもあるのかしら」マダレーナが口を挟んだ。「わたくしは望んでいませんから、まったく。ヒベイロさんはお元気ですし」

「我々は皆、死を免れません、マダレーナさん。確かに誰も神の意図を見抜くことはできませんが、自分の年では……」

「報酬はどれくらいなの？」

「なんですよ！」パジーリヤは驚いた。「あなたがそんな些末なことを気にかけるとは。報酬を受け取るなんて。一方の手からもう一方に流すようなものでしょう」

「それがどうしたって言うの？ ヒベイロさんが仕事を辞めないといけないのなら……報酬はいくらなの、ヒベイロさん？」

帳簿係は白い頬ひげを撫でた。「二百ミルヘイスです」

マダレーナは落胆した。「少ないわね」

「なんと？」私は思わず声を上げた。

「本当に少ないわね」

「くだらない！ ブリットと仕事をしていた頃は、月給百五十ミルヘイスで、食事だってなかったのに。それが今は二百ミルヘイスで、住むところと食事があつて、服も洗濯される」

「そのとおりです」ヒベイロさんは認めた。「何も不自由はありませんし、受け取っているもので十分」

「もし子どもが十人いたら足りませんわ」マダレーナが言った。

「それはそう」グローリアさんが首肯した。

「戯言を抜かしやがって」私は叫んだ。「グローリアさん、あなたまで？ 小説の読み過ぎですよ」

マダレーナは青ざめた。「腹を立てなくともいいでしょう。皆それぞれ考えがあるのよ」

「間違いない。でも、何も知らないことに対して意見を持とうなんて愚の骨頂だ。身の程を知れ。くそったれが。文法なんて諭したこともないんだろ。でもな、私の農園に関することは知っておくべきだ。誰かに諭されるなんてまっぴら御免だ。どいつもこいつも苛々させやがって」

私は料理の上にナプキンを投げつけ、デザートを食べる前に席を立った。結婚して八日後の口論。不吉なきざし。しかし、責任をグローリアさんに押し付けた。彼女が口にしたのはたった一言だけだったのに。

## 第十九章

マダレーナが優しすぎるというのは分かったが、一度で何もかも知ったわけではなかった。彼女は少しずつ心を開きつつも、開き切ることは決してなかった。その責任は自分にあったのか、さもなくば、私に荒れた精神をもたらしたこの荒れた生活のせいだ。

こんな話し方だと、時間を無駄にするというのはごもっとも。ただ、妻の内面を書き落として、この本が何の役に立つだろうか。無意味だとしても、私は書かなくてはならない。

コオロギが鳴くと、食堂のこのテーブルにつき、コーヒーを飲み、パイプ煙草に火をつける。何も思い浮かばないこともあれば、次々に考えが降って来ることもある。そして、原稿のページは前日と同じ、半分で止まつたままである。何行か読み直すと嫌な気分になる。書き直すほどでもない。横に置こう。

ぼんやりした感情に心が乱される。押し潰されそうな不安。マダレーナのもとに戻つて、また他愛もなくしゃべりたい。毎日こんな時間にそうしていた。寂しいのか。いや、違う。心を絞めつける絶望と怒りと途方もない重圧である。

二人で交わした言葉を思い出そうとする。できない。私の言葉はただの言葉で、外側の事実を不完全に再現したものに過ぎない。そして、彼女の言葉には名状しがたい何かがあった。それをもっと感じるために、明かりを消しては自分たちが影に包まれるように身を委ねた。私たちは暗闇に浮かぶ二つの人影になった。

外では蛙が合唱し、風がうなり、果樹園の木々は黒い塊になっていた。

「カジミーロ！」

カジミーロ・ロペスは庭にいて、窓のそばにしゃがみ込んで周りの様子を探っていた。

「カジミーロ！」

カジミーロ・ロペスの姿が窓辺に現れる。蛙は合唱し、風が木々を揺らすが、夜の闇であまり見えない。マリア・ダス・ドレスが入つて来て、明かりを点けようとする。私はそれを制止する。明かりはいらない。

チクタクと鳴る時計の音がゆっくりになり、コオロギがコロコロッとさえずり始める。すると、マダレーナがテーブルの向こう側に姿を現した。私は小声で言う。

「マダレーナ」

彼女の声が耳元に届く。いや、耳元ではない。それに、彼女はもう目の前にはいない。

私はテーブルに寄りかかって、手を組んでいる。物という物が溶けて合わさり、白いテーブルクロスさえも見えない。

「マダレーナ……」

マダレーナの声にまだうつとりしている。何か言っているのか。カエタ

一ノ親方に幾らか送るように頼んでいるんだな。それには苛々させられるが、いつもとは違う苛立ちで、自分をすっかり落ち着かせてくれる昔の苛立ちだ。狂気は人間を苛立たせるが、同時に落ち着かせるものもある。それが私だ。誰に対して苛立っているのか。カエターノ親方に対して。もう死んでしまったとはい、働くべきだと思っている。怠け者が。

テーブルクロスがまた見えるが、組んだ手を置いているテーブルクロスなのか、五年前にここにあったテーブルクロスなのかは分からぬ。

風の音、蛙の合唱、コオロギの鳴き声。書斎の扉が静かに開き、ヒベイロさんの足音が遠ざかっていく。梟が教会の塔の上で鳴く。鳴いたのは本当にその梟だったのか。二年前に鳴いていた梟と同じだろうか。あのときの鳴き声と同じなのかもしれない。

ヒベイロさんは今、大広間でグローリアさんと話をしている。二人が私から離れて、この家にはほとんど誰もいないということを忘れてしまう。

「カジミーロ！」

カジミーロ・ロペスを呼んだはず。田舎者の革の帽子を被った頭が窓のところに見えたりするものの、私の見ているものが現在なのか過去なのか分からぬ。

自分の中で相容れない感情がざわざわと渦巻いている。苛立ちと優しさだ。テーブルを叩いて泣き出しそうになる。

傍目から見ると、私は落ち着いている。テーブルの上の手は組まれたままで、指は石のようだ。それなのに、拳でマダレーナを脅してしまう。奇妙なことに。

農園の単調な繰り返しの日々の中で、ほんの些細なものを見分ける。マリア・ダス・ドレスが台所で鸚鵡を稽古している。犬のトゥバランが向こうの庭で唸っている。牛が家畜小屋で鳴き声を上げる。

大広間は離れたところにある。そこへ行くには長々と続く回廊を通り抜けないといけない。ところが、ヒベイロさんとグローリアさんの会話はずいぶんはっきりしたものだ。難しいのは、二人の言葉を写し取ることだろ。言葉を発することなくしゃべっているのだと認めるほかない。

パジーリヤがベランダで口笛を吹いている。パジーリヤは一体どこをほつき歩いている？

マダレーナは正しくないのだと本人を納得させられたら……。穏やかに暮らしていくことの必要性を説明できたなら……。分かってもらえない。

分かり合えない。これから起こることは、私たちが期待しているものとは大きな隔たりがある。まったく馬鹿げている。

静寂が広がっている。七月だ。北東風は吹かず、蛙は眠っている。梟については、マルシアーノが教会の天井裏に上って、棒ですっかり追い払った。そして、コオロギの穴も塞がれた。

繰り返しになるが、その何もかもにずっと苛々させられている。

分からるのは時計のチクタク鳴る音だ。何時だ？ こんなに暗くては文字盤が見えない。ここに腰を下ろしたとき、振り子のゴーンという音が聞こえていた。はっきりと。時計のぜんまいを巻くべきなのかもしれないが、体が動かない。

## 第二十章

前にも言ったが、マダレーナは素晴らしい心の持ち主だった。彼女の優しさに触れて、心が揺り動かされた。ただ、ご存知のとおり、私は感受性の豊かな男ではない。この二年間、何とか変わろうとしてきたことは確かだ。でも、それだって束の間のこと。

マダレーナの心遣いには目を瞠った。慈善そのものだった。のちに気づいたことだが、それはあらゆる人に向けられる優しさの一端に過ぎなかつた。落ち着くんだ。私はそんなおこぼれに預からうとすべきではない。何かあるだけありがとうございました。しばらくの間、順風満帆にやり過ごした。

グローリアさんに腹を立ててテーブルから離れたことを覚えておいでだろう。そう、そのあと少ししてから、マダレーナがコーヒーを一杯持つて来て、いらないことで後悔していると仄めかしてきた。

「軽はずみだったな」

「そうね」顔をわずかに赤らめたマダレーナがためらいがちに言う。「思慮に欠けていたわ」

「言葉にする前に考えないと」

「そのとおりね」明らかに動搖した様子で彼女が言った。「二人が雇われ者だということを忘れて、ドジを踏んでしまったの。ええ、大きなドジを」

そこで、私はコーヒーカップを手に取って、穏やかに言った。

「いや、そこまでは言っていない。どうして誇張する？ 誤解があつただけじゃないか。ありがとう、砂糖は少しで。ここは他所とは違う。映画、飲み屋、招待されたパーティー、宝くじ、玉突きといったくだらないもの

は何もないし、お金の使い道さえ分からぬこともある。教えてやろう。私は他人の百ミルヘイスで生活を始めた。なあ、百ミルヘイスだ。それがゴムのように伸びたんだ。今手元にあるものはその百ミルヘイスから始まつた。あの泥棒野郎のペレイラから借りた。ユダヤ人ならではの高利貸しで、月五パーセントも取りやがつた」

マダレーナは育ちの良い少女のような態度で、じっと耳を傾けて傾いていた。

「そうよね、そうよね。問題なのは、わたくしがまだこここの環境を知らないことだわ。慣れないと」

私はカジミーロ・ロペスを呼んで、コーヒーカップと盆を渡した。それからパイプ煙草に火をつけた。

「私が思うのは……」立ち上がる。「一切、何の後悔もしない。終わつたことはもう終わったこと。まあつまり、渋い顔をしていても、誰も前には進めない。だから、グローリアさんを怒鳴ったあのことも……」

「気の毒だわ。ちゃんと話も聞いていなかつたのに。ただただ一言、口にしただけ」

「そう。それでお願いがある。傷つけるつもりはなかつたと、それとなく伝えてくれないか。年老いた、敬うべき人……。そんなつもりはなかつたと。いいか？ 私は少し気難しい人間なんだ」

ご覧のとおり、私たちは二本のバナナのように穏やかだった。こうしてひと月が過ぎた。何度も言ってくるので、仕事を与えた。

「郵便物を整理すれば良い。報酬がいるのか。分かった、それはあとで話し合つて決めよう。ヒベイロさんが口座を作ってくれる」

## 第二十一章

そこで、私たちは慎重に摩擦を和らげようと石綿を使ってはみたが、また衝突が起こつた。その後もたびたび。

朝、マダレーナは書斎で仕事をしていたが、午後になると外へ出て、住民たちの家を見て回つた。顔色が悪く唇の分厚い子どもたちが、彼女のスカートにしがみついていた。

学校へ行くとパジーリヤの教育方法を批判し、地球儀や地図、そのほかの教材が必要だと私に口うるさく言い出した。ここで細かく言わぬのは、書類ファイルを調べるのが億劫だからである。ある日、ぼんやりしている

ときに注文させた。請求書が届いたとき唖然とした。六コント・デ・ヘイスというとんでもない数字。雇われ者の子どもたちのために、ノートやカードなどの文房具で六コントとは。考えてみてくれ。読み書き、暦、黒い表紙のプロテスタントの聖書を刑務所で学んだ男が、これほどの大金を費やすとは。それでも堪えた。そうしたのも、妻との揉め事は避けたようとしてきたし、州統領がここに来たときにそんなごたごたを見せてしまう姿を想像したからだ。いずれにしても、余計な出費だった。

私は請求書に署名をして、帽子を被って出て行った。家畜小屋を通りかかったとき、動物たちの餌がないことに気づいた。

「これはよろしくない」そして叫んだ。「マルシアーノ！」

叫び声が虚しく響いただけだ。苛々して坂を下りた。その先にある学校の出入り口のところで、腰掛けに跨ったマルシアーノがパジーリヤとだらだらしゃべっている様子が目に入った。

「仕事に戻らんか、この恥知らずが！」

「おっ、終わりましたよ、パウロさん」マルシアーノが背を伸ばして、口ごもりながら言った。

「何も終わっとらんだろうが！」

「終わりましたって、確かに。神に誓って言いますよ」

「この嘘つき野郎。家畜が腹を空かせて死にそうにして木を齧っているぞ」  
マルシアーノはカッとなった。

「ほんのさっきまで餌の箱はいっぱいでした。あんなに食べる家畜なんて見たことありません。それに、もう誰もこの土地で生活するのに耐えられませんよ。気が休まることもありませんし」

それは事実だったが、似たようなことを言って来た住人はまだいなかつた。

「偉そうにしやがって、この野郎が」

私は羽交い絞めにして、地面に倒した。マルシアーノはふらふらと立ち上がって怯むと、さらに五度殴られて、そのたびにまた倒れた。最後の一撃で地面に倒れてもがいた。それからようやく立ち上ると、俯いて鼻血を袖で拭いながらよろよろと歩いて行った。しばらく呼吸を整えた。私はパジーリヤの方を向いた。

「悪いのはお前だ」

「自分ですか？」

「そう、お前だ。あの恥知らずをたぶらかせてばかりいる」

パジーリヤは青ざめて弁解した。

「何にも吹き込んでいませんよ、パウロさん。不公平ですって。あいつこそ出しやばりで。信じてください。誘い出す前に『マルシアーノ、家畜に餌をやりに行った方がいいぞ』と声をかけたくらいで。言うことを聞かずに、そこでだらだらしていて。うんざりです。悪いけど、あいつの顔なんて見たくもありません」

私はパジーリヤを怒鳴りつけるところだったが、マダレーナの姿が目にに入った。彼女は湖の堤防のところでぼろぼろになったマルシアーノの方を向いていた。ぶつぶつ言いながら近づいて行った。

「生意気だ！ 手を差し伸べたら、つけあがる」

しかし、怒りはもう収まっていた。むしろ煩わしかったのは無駄な教材の入った箱だった。こんな僻地で一体何のために。学校が選挙人の資格を取れるような人材を出せたなら、州統領は喜ぶだろうが。

「涼んでいるのか、どうなんだ？」マダレーナに訊いた。家畜小屋の暗い屋根をじっと見ていた。

返事はなかった。私は家畜小屋の水飼い場、湖の排水路の向こうある干上がった小川の川床に目を遣り、それから山の斜面にある石切り場を眺めたが、それはただの白みがかった斑点だった。茂みは暗くなりつつあった。冷たい風が吹き始めた。残っていた綿花の積み荷が綿繰り機に運ばれてきた。汽笛がゆっくりと鳴り響き、作業員たちは仕事の手を止めた。時計を見ると六時だった。

「なんて酷い」マダレーナが叫んだ。

「何だって？」

「なんて酷い」繰り返した。

「何が？」

「あなたの振舞いよ。なんて残酷なの。やり過ぎでしょう」

「一体何のことを……」

気でも狂ったのだろうか。そうではない。目はしっかりとしていて、唇はきゅっと結ばれ、眉間にしわが寄っていた。

「分からぬ。説明してくれないか」

わなわなと声が震えている。「どうしてあんな風に人に手を擧げるの？」

「ああ、なんだ。マルシアーノのことか。何かもっと深刻なものかと。驚

かせないでくれ」

あのとき、こんな些細な一件がまともな人間たちの間で軋轢を生むとは思わなかつた。

「人をあんな風に叩くなんて。なんて酷い！」

何かほかの理由で不機嫌なのだろうと思った。あれはくだらないことだったからだ。

「つまらないことだ、マダレーナ。取り越し苦労はするな。あの連中は命令どおりに動きはするが、殴らないとどうにもならん。それに、マルシアーノは人間でもない」

「どうして？」

「そんなこと知るわけあるか。神の思し召した。軟弱な野郎だ」

「そうよね。あの人にいつも見下していれば」

「馬鹿なことを言うな！」腹を立てた。「あいつを知ったときにはもう軟弱な野郎だった」

「今までずっと蹴られてきたんでしょうね」

「まさか。生まれたときから軟弱な野郎だからだ」

マダレーナは黙って背を向け、坂を上って行った。私は苛ついたまま後ろをついて行く。突然こちらに振り返ると、青い目には炎が浮かんで黒同然の色をしていた。声はかすれている。

「でも、酷すぎるわ。何のためにあんなことをするの？」

私は自分を抑えられなかつた。

「当然のこととしたまでだ。それに、いちいち弁解することはしない。分かっているだろう。やらないといけない。三回、四回、男を殴るのは上等だろう。どうしてそんなにマルシアーノの肩を持つんだ？」